修士論文（要旨）
2018 年 1 月

中国における日本語学習者の学習環境デザイン
―学習者と学習環境との相互作用を中心に―

指導　齋藤伸子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
215J3905
陳 釗

Master's Thesis(Abstract)
January 2018

Learning Environment Design for Learners of Japanese in China: Focusing on the Interaction between Learners and Their Learning Environment

Zhao Chen
215J3905
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

第 1 章　はじめに 1
1.1 研究背景 1
1.2 研究動機 1
1.3 研究目的 2
第 2 章　先行研究 3
2.1「学習環境」と「学習環境デザイン」「持続可能な学習環境デザイン」 3
2.2 学習動機 3
2.3「自律学習」と「持続可能な学習環境デザイン」 5
2.4「持続的学習環境デザイン」の必要性 6
2.5 学習環境に関する研究 7
2.6 相互作用と学習環境デザインとの関係 7
第 3 章インタービュー調査の概要 8
3.1 調査協力者のプロフィール 8
3.2 調査方法 9
3.3 データ収集方法と範囲 9
3.4 分析の枠組み 9
第 4 章　学習者へのインタービューの結果と分析 11
4.1　学習者 A へ調査の分析 11
4.12 学習者 A への分析のまとめ 21
4.2　学習者 K への調査の分析 22
4.21 学習者 K への分析のまとめ 33
4.3　学習者 D への調査の分析 34
4.31 学習者 D への分析のまとめ 44
第 5 章　考察 46
5.1 相互作用のトラブルが生じる要因 46
5.1.1　マイナスな意味づけ 46
5.1.2　学習動機の弱さ 46
5.2 学習環境の特性 47
5.2.1　学習環境の特性―多重性 47
5.2.2　学習環境の特性―持続性 51
第 6 章　総合考察およびまとめ 51
6.1 学習者にとって、学習環境をデザインするときの注意点 51
6.2 教師にとって、学習環境をデザインするときの注意点 52
第 7 章　今後の課題 53
参考文献 I

要旨

現在、中国における本語学習者数は、海外第一位となっている（国際交流基金 2015）。このうち、中国の高等教育の日本語学習者は 679,336 人で、中国の日本語学習者全体の七割を占めている（国際交流基金，2012）。また、田中（2003）は中国の大学の日本語教育の中で、日本語専攻は開設時期が早く、他を牽引していると述べている。しかし、日本語学習者が増えるにつれ、中国の日本語教育の現状における問題点も顕著になっている。袁（2014）は中国の日本語教育の現状における最大の問題点は、日本人と交流する機会が少ないこととネイティブの日本語教師が少ないことだと指摘する。中国の大学の日本語学習者にとっても、生の日本語と日本人との接触が少ないことは、問題である。

このような中国の大学の日本語教育の現状を踏まえ、本研究では学習者の授業内の学習環境と授業外の学習環境との相互作用を焦点にし、学習環境デザインへの示唆を考察する。

「学習環境」と「学習環境デザイン」がどのようなものであるかについては、美馬・山内（2005），美馬（2010），細川（2015），文野（2004）などの先行研究がある。以上の研究を踏まえ、本研究においては、文野（2004）の定義に基づき、学習環境を、学習者が会って話をする、直に見る、あるいは電話やメールでやり取りをするなどの目に見える接触が行われている環境であると定義する。それに対し、「学習環境デザイン」とは、目的、対象、要因、学習に至るまでの過程などを意識した活動であり、そこに関わる人々の活動を物理的環境も含めて、組織化し、実践しながら、振り返り、位置づけ、修正していくという、構成的かつ循環的で、環境に開いた学習環境を創造する行為である（美馬 2010）。

前述の研究目的を達成するために、本研究では、中国の A 大学の日本語専攻の 2 年生 2 人と日本語専攻の卒業生1名を調査対象者に選定し、調査を行った。調査ではまず、各調査対象者に言語ヒストーリー（(Language learning history 以下 LLH と略す）を書いてもらった。3 人の日本語学習の歴史を把握した上で、不明点と詳しい説明がほしいところを質問項目とし、調査対象者にインタービューを行った。

調査結果の分析から、学習者と学習環境との相互作用がうまくいかない場合、その理由は「マイナスの意味づけ」と「学習動機の弱さ」にあるということがわかった。また、学習者と学習環境の相互作用の実態を分析することから、学習環境デザイナーが同じ学習環境に複数存在することがわかった。それは学習環境の「多重性」を示す。また、学習環境デザイナーが学習実践者と一致することから、学習環境に「持続性」があるということもわかった。

上述した結果から、学習者が持続的に学習できるように学習者及び教師が学習環境デザインする際に留意すべきことについての示唆が得られた。学習者は学習環境から受けた影響にプラスの意味づけをすることが重要である。学習動機の強化及び多様化も不可欠である。弱い学習動機を強化したり、学習動機を多様化したりすることによって、学習者による学習環境との相互作用はよりうまくいくように、持続的に学習できるようになるであろう。また、教師は多様のニーズを持っている学習者の多様性を重視しなければならない。授業内の学習環境と授業外の学習環境を関連させ、学習者が学習環境をデザインできるように支援すべきである。

参考文献

青木直子　(2005)「自律学習」『新版日本語教育事典』大修館書店

秋田美帆・安田励子・内田陽子・牛窪隆太(2013)　「日本留学は日本語学習を保証するか　－学習環境の連続性と分断に関する事例研究―」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第 10 号，pp47-56

板井美佐(1997)　「言語学習についての中国人学習者の BELIEFS－上海復旦大学のアンケート調査より―」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』12，pp63－88

小池伸一(2012)　「動機づけ理論と学生指導への応用 ： 自己決定理論の援用」『保健医療技術学部論集』6，pp65-78

立間智子(2010)　「ピア・ラーニング利用による自律学習、協働的学習を促す学習環境デザインの試み ： アゼルバイジャンにおける日本語学習者と邦人との交流活動「日本語会話クラブ」の実践」『国際交流基金日本語教育紀要』6，pp139-155

梅田康子(2005)　「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割－学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る－」『言語と文化 ： 愛知大学語学教育研究室紀要』第 39 巻 12 号 pp.59-77

袁莉平(2014)　「中国の大学における日本語教育の現状―中国南東部の一国立大学を事例に―」『現代社会研究科研究報告』

岡崎敏雄 (2014)「日本語教育の教室談話テキスト分析―内容重視日本語教育における教室談話テキスト分析方法 I」『方法論の前提と枠組み―言語学論叢 』オンライン版第 7 号(通巻 33 号)

菊岡由夏(2005)　「教室コミュニティの歴史と言葉を研究する」西口光一（編著)『文化と歴史の中の学習と学習者－日本語教育における社会文化的パースペクティブ－』第 9 章，凡人社，pp212-230

田中祐輔(2013)　『中国の大学専攻日本語教育の研究　―文学思想による規定と日本の国語教育からの影響―』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文

田中祐輔・張玥(2011)　「学習ニーズの多様化に対応する　日本語教材開発の取り組み―負担大学日本語学習状況調査による「学習当事者ニーズ」の検討とその効果」『神奈川大学大学院言語と文化論集』17，pp169-185．神奈川大学大学院　外国語学研究科

西口光一(編著)(2005)　『文化と歴史の中の学習と学習者－日本語教育における社会文化的パースペクティブ－』凡人社

福島青史・イヴァノヴァマリナー(2006)　「孤立環境におけるに日本語教育の社会文脈化の試み」『日本語教育紀要』第 2 号，49－64、国際交流基金

富吉結花(2016)　「日本語学習者の学習意欲に影響を与える要因はどのように作用するか―タイ中部 P 大学の主専攻者を取り巻く文脈と L2 Self から―」『言語教育研究』6，pp9-30.

細川太輔(2015)　「学習環境デザイン論における学びの姿―「2－2 ふれあい動物園をつくろう―友達が動物と触れ合いたくなるようなガイドブックを作ろう―」の実践」『教材研究』第 26 巻，pp113-120

羅曉勤 (2005)「学習者のモチベーションを研究する」西口光一編『文化と歴史の中の学習と学習者―日本語教育における社会文化的パースペクティブ』凡人社

美馬のゆり(2010)　『学習の共同性および社会性を基軸にした学習環境デザイン研究』　電気通信大学大学院情報システム学研究科　博士（学術）の学位申請論文

楠木理香・工藤多恵(2006)「外国語学習の動機に関わる要因　―アンケート．面接調査結果に

よる‐考察―」.『山口幸二教授退職記念論集』. 立命館大学法学会.
文野峯子(1999)　学習過程における動機づけの縦断的研究―インタービュー資料の複眼的解釈から明らかになるもの―『人間と環境―人間環境学研究所研究報告』
櫻井茂男(2009)『自ら学ぶ意欲の心理学-キャリア発達の視点を加えて』有斐閣
林さと子(2006)　言葉を学ぶ一人ひとりを理解する　第二言語学習と個別性　第二部言語習得研究から見た第二言語学習　習得の個別性
義永美央子(2015)　多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集 19 pp13－34
Shoaib, A. & Dörnyei, Z. (2004)　Affect in lifelong learning: Exploring L2 motivation as adynamic process. In P. Benson, & D. Nunan(Eds.), Learners' Stories: Difference and diversity in language learning. Cambridge: Cambridge University Press. pp.22-41
Dörnyei, Z. (1999) Motivation. In B. Spolsky (Ed.), *Conciseencyclopedia of educational linguistics,* Oxford: PergamonPress, 525-532.